

今日は召天者記念礼拝ということですので、愛する者の死について、またいずれはやってくる自分の死について、共に考えたいと思います。

いろいろな考え方があると思いますが、一つの考え方に、「死は救いだ」というものがあるようです。生きている間のいろいろな悩み苦しき…こういうものから放免されるのですから、「死は救いだ」というわけです。「あなたは、十分苦しんだ。もう苦しまなくていいところに入ったのだから、安らかに眠りください。」と語る人の言葉を耳にすることがあります。老人ホームに行きますと、ジィ〜ッと座ったまま一点を見つめて動かないお年寄りを見かけます。「早くお迎えが来てほしい。」と語る方の声を聞くこともあります。

『死は救いだ。』実は古代ギリシア人もそう考えたようです。生きている間、魂は肉体という牢獄に閉じ込められている。そこには病気や老いやそのほか様々な苦しみがあり、様々な拘束があつて魂は物事をよく見ることができない。死ねば、魂はそこから抜け出し、理想の世界で暮らすことができる、というのです。

本日の聖書の背景となっているのは、この古代ギリシアの死生観で、コリントの教会にもこのような考えが根強く残っていました。ですから、パウロたちが宣べ伝えた『復活』は、重要な教えに思われなかったのでしょうか。「復活なんてありもしないことを宣べ伝えるのではなく、死んだら天国に行く、それでいいじゃないか」、というわけです。

けれども、このような考え方、「死」を良いものだと考えるのにはやはり無理があります。死には、どうしても辛さが伴うからです。今日の聖書箇所には「死のとげは罪である」とあります。「死のとげ」…死には「とげ」がある。チクッと刺さる、いやむしろグサッと刺さる痛みがあるというのです。「死は救いだ」などと軽々しく言うことはとてもできないのです。誰がなくなつたとしても、必ず痛みがあります。「お悼(いた)み申し上げます」と心から言わずにはおれないのです。

この痛みとはなんなのでしょうか？昨年亡くなった私の父は 90 を過ぎて大往生したと周りからは言われていますが、障害者を持ち、16歳のころから片足がありませんでした。頑固な性格で、家族から疎んじられることもありましたが、でも、私にとっては大切なお父さんでした。大恩人です。でも、返事はもう帰ってこないわけですよ。

死には「とげ」がある。「チク」か「グサ」か、人によって色々であるにせよ、痛みはあるのです。この「とげ」の正体は何でしょうか。聖書は「死のとげは罪である」と書いてあります。「罪」…これは法律を犯したような罪のことを言っているのではなく、与えられた命を無駄にしてしまったという後悔です。せっかく生きてきたのが台無しになったという悲しみです。それを罪と言うわけです。

パウロは、「あなたがたに神祕を告げよう」と言います。そしてこう続けます、「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、死ぬべきものが死なないものを着る」(15:53-54)。死んだら、着物を着せてもらえるというのです。聖書のほかの箇所には、着物で裸の恥がおおわれると、書かれています(黙 3:18)。罪がおおわれるということです。罪がなくなるわけではありません。

朽ちていくほかない汚れた身体、汚れた人生…これがこのままで覆われ良しとされる。罪の贖い、神ご自身であるイエス・キリストは十字架で人間の罪を未来永劫にわたって引き受けてくださった。キリストの業…これが上に着る衣なのです。

古い汚れた地上の人生はさっぱりと捨て去って、新しい天国で楽しくいきましょうというのではなくて、古い汚れた残念な人生も神様に良しとされて、欠けを補われ、破れを覆われて、そのまま天に迎えられる、こういう天国への道があるということです。これが復活です。

ですから大切にしなければいけません、今の地上の命を。それがどんなに粗末なものでもです。病気の体、こじれた人間関係、決裂した人々、失敗だらけの投げ棄ててしまいたいようなものばかりかもしれませんが、投げてはダメです、大切にしなければなりません。

あるとき、イエスの周りに集まった群衆に食べ物がなくなってみんなが飢えたことがありました。そのとき子どもが五つのパンと二匹の魚を差し出しました。大勢の群集にはとても足りない。でもイエス様が、感謝してそれを受け取ってみんなに配ったら、全員お腹いっぱいになった、というエピソードです(ヨハネ 6:1-15)。私達の人生も、せいぜい五つのパンと二匹の魚、とてもとても足りない、役に立たない、無益に思える人生…でもイエス様はこれを役に立つものとして用いてくださるのです。

NHKの「地球ドラマチック」。数百万年前の人類がすでに埋葬をしていた可能性が発掘調査で示唆されました。彼らもまた仲間が死んだとき、死後の幸せを願うとともに、死の痛みを共にしたのかもしれませんが。

震災で家族を亡くした人々の「風の電話」や「漂流ポスト」が話題になりました。そんなことをしても…と一方で思いながらも、理屈抜きに心を打ちます。亡くなった方々を思うときに、理屈ではつかみきれないとても大切なもの(事実ではなく真実)があるように思うのです。「あの人はもういない」とわかっている、それでは終わらない何かを直感しているのではないのでしょうか。

V. フランクル、精神科医、ユダヤ人、アウシュビッツに収容されました。妻の生死もわからない状態でした(実際には亡くなっていたのです)。しかし、心の中の妻に対して、彼は、愛と思いやりを示すことに決めました。妻が心の中に存在し続けるように、数えきれないほどの方法を考え出したといいます。そしてそれが、死と隣り合わせの収容所生活の苦悩に耐え忍ぶに値するだけの意味を与えました。

過酷な肉体労働の中で、彼は妻と会話する妄想にふけることで耐え忍んでいました。その時彼は、俄然気づいたのです。フランクルの言葉です、「愛は、一人の人間の身体的存在とはどんなに関係が薄く、愛する人間の心の中にある存在とどんなに深く関係していることか」(『夜と霧』p.124-125)。

復活の日、亡くなった人々との新しい関係が私達を待っています。そしてそれを、今既に私たちは「愛する」という形で味わうことができます。たとえ一方通行でも、知性が「妄想だ」「無駄だ」と言ってきたとしても。そして、今現在不足するものがあつたとしても。失敗、やり残し、後悔、そして罪…それでも、その時には欠けを覆われて完全なものになっています。私たちの労苦は全く無駄になりません。たとえ五つのパン、二匹の魚でも。